

1. 11月例会の報告

11月30日、国分寺「ふる里」で関氏、沢口、柴野氏の発表が行われた（参加者10名）。関氏からは、北アルプス蝶ヶ岳西側の周氷河岩屑斜面の形態および構成礫径と地質との関係が述べられた。沢口、柴野両氏からは、日高山脈札内川八の沢における標高1000m以下のモレーンと堆積物についての報告があり、日高山脈ではその程度の高度まで氷河が拡大していた時期があったのではないかという見解が述べられた。例会の後、天ぷら、手打ちそばなどを味わいながらの懇親会が開かれた。今回は明大、学芸大の若い人が多く着はすべてたいらげられた。

2. 12月例会と忘年会のお知らせ

12月21日（土） 14：30～
法政大大学院（2F）202教室

- 1）小野有五氏（筑波大）：ラップランド不連続永久凍土帯の地形
- 2）松垣大助氏（建設大）：北上山地中部における斜面物質移動期と斜面形成
- 3）年末恒例スライド大会

スライドを御自由にお持ちよりください。寒冷地形に関係ないスライドも歓迎します。

※例会終了後、法政大近くで忘年会を開きます。遅くなられる方は大学院202教室に場所を掲示しておきますので、それにしたがって忘年会場においでください。

3. 来春の日本地理学会時における例会について

86年4月5日の埼玉大における日本地理学会では、極地地形研究グループとの合同で寒冷地形談話会の例会を行う予定です。発表希望の方がございましたら、できれば極地地形研究グループの発表として日本地理学会に申し込んでいただき、1月13日までに予稿集版下を地理学会へ直接提出してくださればさいわいです。

（以上、岩田氏よりの打診）。

「北アルプス 蝶ヶ岳周辺の周氷河性岩屑斜面」

関 秀 明 (東京学芸大・M1)

北アルプス南東部の蝶ヶ岳には非対称山稜が発達しており、主稜西側の平滑斜面上部(森林限界付近より上方)には、マトリックスを欠いた岩屑斜面が分布している。演者は、これらの岩屑斜面と、岩質の関係について調査を行ない、若干の知見を得たので報告を行う。

- (1) 蝶ヶ岳主稜西側の岩屑斜面は、砂礫地タイプのものと、岩塊斜面タイプのものに区別することが出来る。前者では、現成砂礫地のコンベックスな斜面が見られ、今なお物質移動が盛んである。これは、粘板岩、硬砂岩等の古生層地域に分布する。一方、後者では、主稜線から斜面下方に、長大な岩塊斜面が見られ、岩塊は安定化しているため、かなりの部分をハイマツが覆っている。これは、花崗斑岩地域に分布する。
- (2) 現成砂礫地の下方には、ハイマツに覆われた岩屑斜面が連続するが、2600m付近で約1mの小崖を境に、表層の岩屑は消失して、森林土壌の覆う斜面に連続する。一方、岩塊斜面は、2520m付近まで分布し、末端は約2~3mの小崖を境に、森林土壌の覆う斜面に連続する。この様に、蝶ヶ岳の岩屑斜面は、その分布を明瞭に追うことが可能である。
- (3) この様な斜面タイプの相違をもたらした原因として、現在および過去の寒冷期の周氷河性岩屑生産を考えた、現在の環境下の周氷河性岩屑生産は、砂礫地の分布の偏りから、古生層地域で活発であると考えられる。一方、蝶ヶ岳の岩屑斜面のかなりの部分を占める、いわゆる化石周氷河斜面に相当するものは、花崗斑岩地域でかなり広く分布していることから、過去の寒冷環境下における周氷河性岩屑生産が花崗斑岩地域で活発であったことが推定される。
- (4) 古生層地域と花崗斑岩地域の斜面形成期の相対的關係は、明瞭にはわかっていない。しかし、現在の植生の遷移の状況、古生層岩屑斜面の下方に明瞭な堆積地形が見えられない事などから、両地域の岩屑斜面の形成stageはほぼ重なっていると考えている。

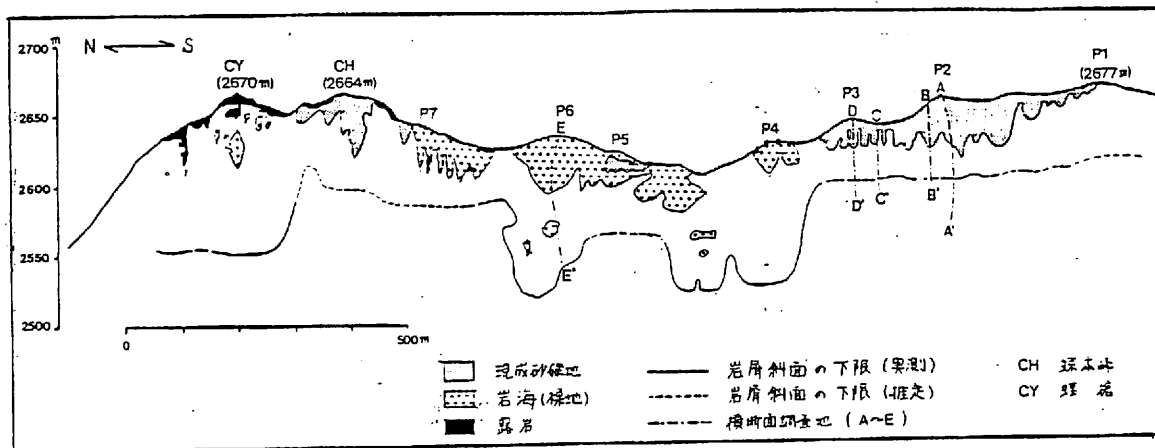


図1 蝶々山主稜面側の岩屑斜面の垂直分布 (王稜線南北断面に投影)

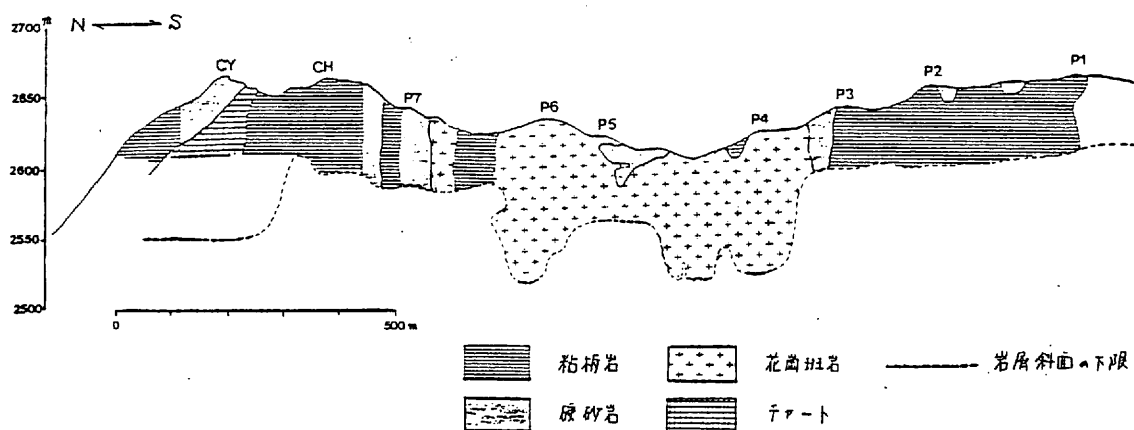


図2 蝶々山主稜面側斜面の表層地質図 (王稜線南北断面に投影)

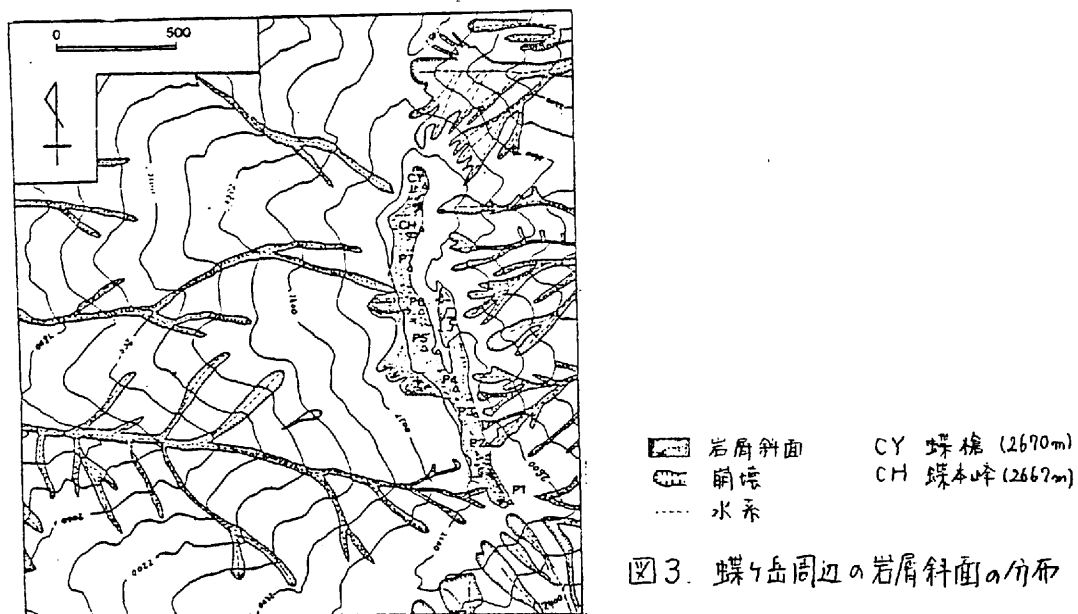


図3 蝶々山周辺の岩屑斜面の分布

寒冷地形談話会 11月例会発表要旨, 1985.11.30

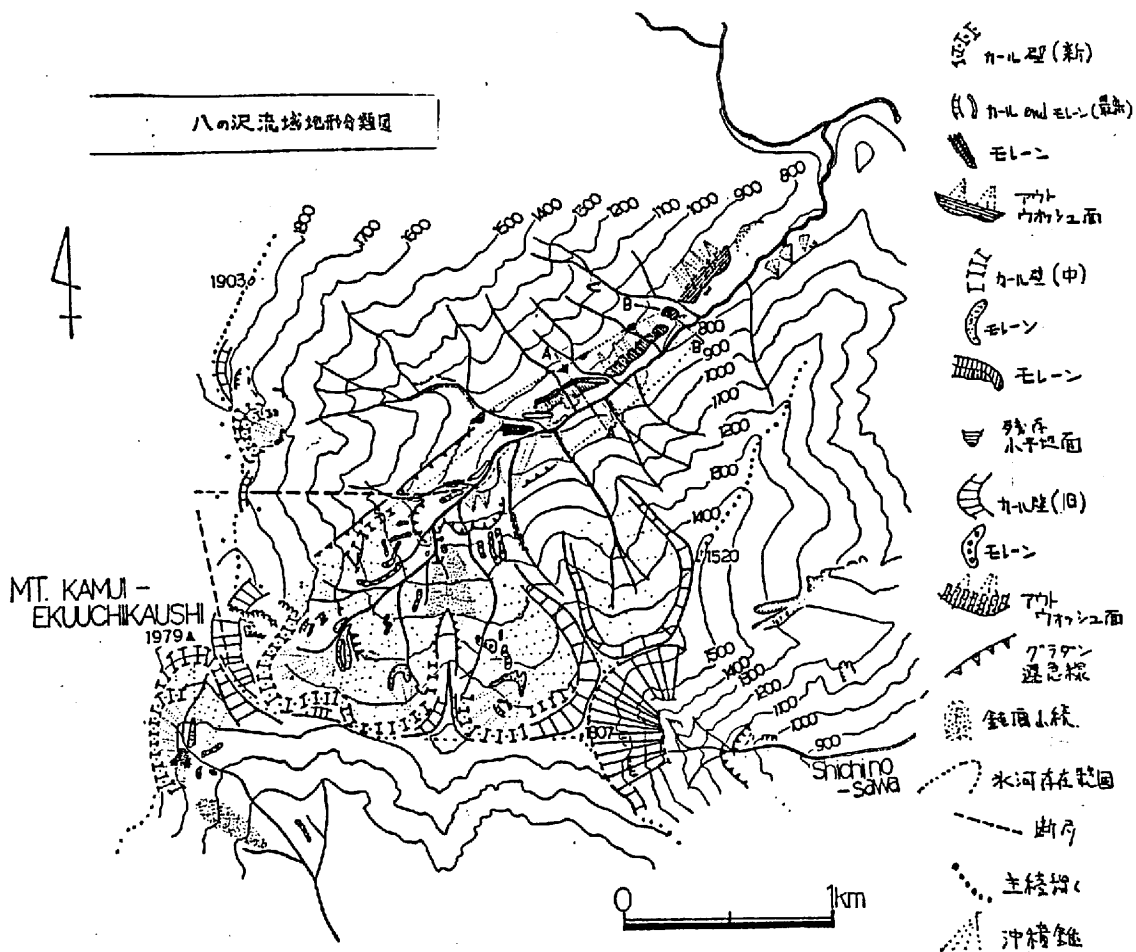
日高山脈札内川源流の氷河地形 澤口晋一(明大)

柴野明彦(明大)

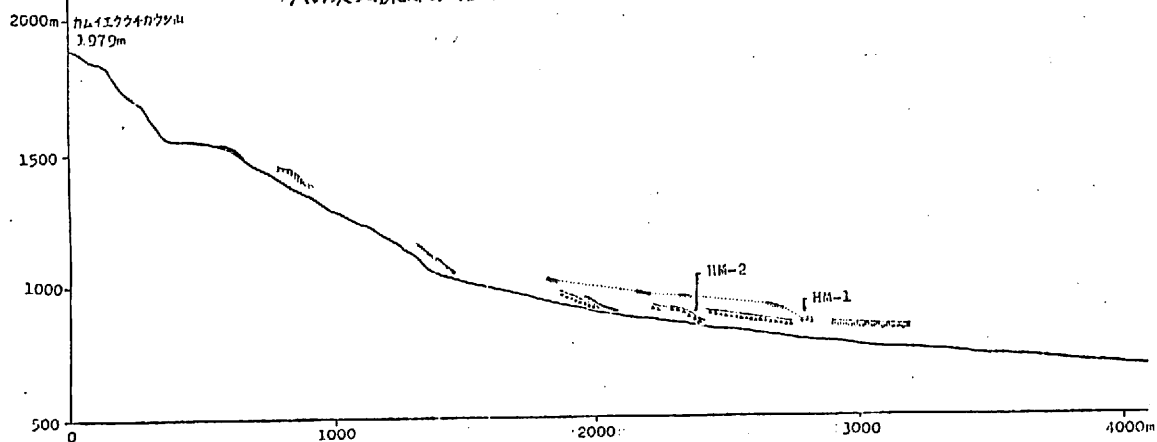
札内川源流部ハの沢で氷河地形の調査をおこなった結果, これまで日高山脈で確認されたことのない低位置に保存状態の良いモレーンを発見したので, その地形・堆積物等について報告する。

モレーンはハの沢左岸の標高850~900 mの位置に存在しており, ラテラルモレーンから次第に下流側に傾斜しながらターミナルモレーンに移行する。さらに, ラテラルモレーン内側にはブランドモレーンが, 下流側にはヴァリートレーンとみられる地形が連続し, 1つの氷河進出期を示す堆積地形のパターンとなっている。モレーンはガリー侵食もそれ程進んでおらず, 新鮮な地形を保持している。植生もササに一面がおおわれる他は、グケカンバが部分的にみられる程度である。亜間氷期を間にはさむ地形としては形態が新鮮すぎることから, トツタベツ亜氷期のモレーンである可能性もある。さらにこのモレーンの上(比高15~20m)の谷壁中には段状に小平坦面が残存している。この面はハの沢最上流部付近から下流に向って次第に比高を減じてハの沢下流にある最高位段丘に接続する。この^少平坦面は非常に断片的であること, また段丘面は背後の谷壁からの供給物質によってかなり変形していることなどを考えると, むしろこれら一連の地形が亜間氷期を経ているものである可能性がある。現時点ではいずれの地形についても時代決定に関する資料は持ち合わせていない。

八の沢流域地形分類図



八の沢河床縦断面図



モレーン, アクトウカウシ面, 左岸氷食谷頭壁 (高さ1360~1400m)

新年焼き餅登山のお知らせ

新年早々低山に登り、餅を食して親交を温める行事が会員の一部の中で恒例化しています。来年正月にこの行事を寒冷地形談話会として催したいと思えます。参加は全く自由ですので、滅多に例会に出られる機会のない方、正月ヒマな方、みんなで新年登山を楽しみましょう。

目的の山：桂川南岸「倉岳山」（990m）

見どころ：扇山断層と山麓緩斜面を桂川対岸から見下す

コース：梁川駅→立野峠→倉岳山→穴路峠→鳥沢駅

日時：昭和61年1月3日（金）-日帰り-
午前9時20分

集合場所：中央線梁川駅前

交通：高尾8：48→梁川9：15

（新宿-高尾間国電：約1時間）

甲府8：18→梁川9：19

持ちもの：コンロ、焼きあみ、弁当、餅、のり、醤油、酒類、防寒衣、
雨具、懐中電灯、水筒

地形図：5万図「上野原」

※前日19：00時前後の天気予報で、当日が雨か雪の予報が出たら中止します。

（世話人：清水長正）